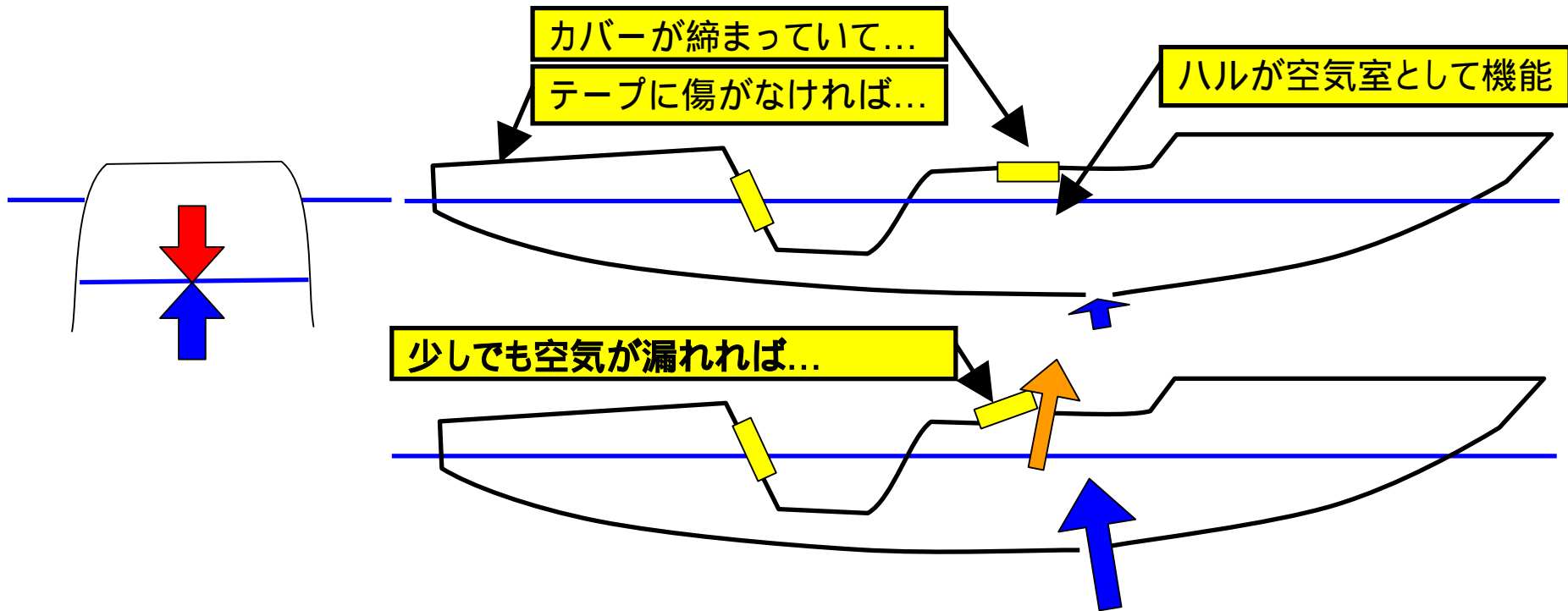


6. 艇の整備, 取り扱いの重要性



- 6.1 モノコック艇の船底に穴が開いたら？
- 6.2 軽合金部品の腐食
- 6.3 カーボンシャフトのリスク
- 6.4 救命具のこと
- 6.5 浸水と対策

6.1 船底に穴が開いたらどうなる？

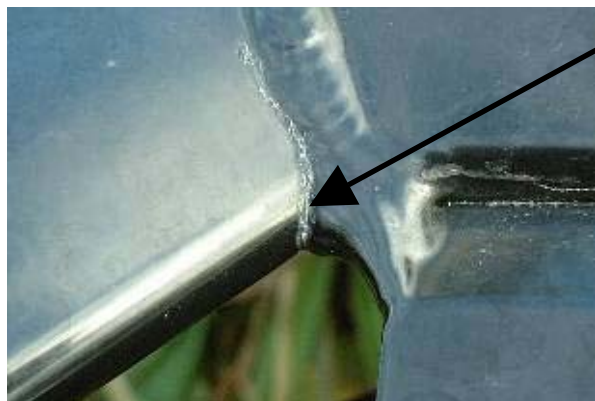


お風呂で洗面器を逆さに沈めても、空気は漏れません。

ボートも同じ。(気密室部分では)船底に孔が開いても、他が完全であれば、容易に浸水しません。しかし、カバーやテープの傷みから空気が漏れる状態だと、急速に浸水します(小さな穴でも急速に空気が抜けます)。

ボートの部品は、どんな小さなものも、安全のために重要です。ボートはただの道具ではなく、命を預ける重要な相棒だと理解し、丁寧に整備してください。

6.2 軽合金部品の腐食



軽合金ウイングリガーの亀裂・漕ぐたびに状況は悪化



レールとの亀裂・ステンレス(異種金属)との接触で進む電食.

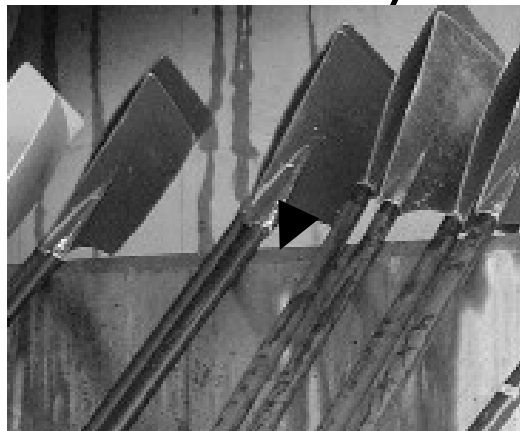


古いアルミハンドルではこの部分が腐食し折れます(欠陥). 少なくともシングルスカルでまだこのタイプを使っている場合は, すぐに使用を中止し, コンポジットに交換しましょう.

軽合金部品の腐食に注意しましょう(特に海水域の場合). こまめに分解クリーニングし, 乾燥状態で保管することが大事です.

6.3 カーボンシャフトのリスク

シャフトを少しでも傷つけてしまうと、レースで大きなリスクを負うことに。



試合で折れてしまったカーボンシャフト

木製オール時代は、ブレードに細心の注意が必要でした。

現在のオールは、ブレードは丈夫でそう神経質になる必要はありません。しかし代わってカーボンシャフトには最新の注意が必要です。

硬いもの(コンクリートや金属など)に当たって少しでも傷がつくと、(まるでガラス切りで傷をつけられたガラスのように)負荷が掛かると簡単に折れてしまいます。

シャフトを決して硬いものに当たてはいけません。

6.4 救命具のこと



ときどき膨らませて見よう。濡れて不潔な状態では、いざというとき使えない。

耐用年数にも注意しよう。

- ・救命具は常に携行しましょう。
- ・使い方を理解しておきましょう。(一度は実習しておく)
- ・適時点検し、いつも使える状態にしましょう。



ボート専用のベストタイプ(桑野造船HPより)他に自動膨張式もある。

6.5 浸水・沈の場合の対処

- 浸水の危険: 浸水で艇が沈下すると, 加速度的に浸水が進行.
- 構造的要素: 良い1×は浸水しても問題なし~2×以上では漕げなくなる.
(英国では, すべての艇で, デッキ下も浮力室となるように安全ルールが変更された. 完全に浸水しても, 漕ぎ続けられることが条件)
- 4+ ~ 8+: 浸水したまま乗り続けられない. 1× ~ 2×: そのまま維持できれば維持する. (ただし艇の強度による.)
- 浸水後の回収時: 不用意に持ち上げない(コックピット内, デッキ内の水を排水しないと艇が折れる. 特に1×, 2×で艇を折る事例が少なくない.)

オールを外してロールさせながら水を出せばよいのだが, パニックになると適切な行動がとれない.

浸水したまま乗り続けていて艇を折った事例. なお疲弊したクルーを残すことはある.



7. 安全実技講習会の計画

集合形式の講習は以上ですが、今後以下のような実技講習を各団体にて実施することをお勧めします。

以下は、自主的に実施していただく場合の参考・注意点です。

実施すべき安全実技講習項目(案)

7.1 スイムテスト

7.2 沈の回復訓練

7.3 心肺蘇生法

7.4 事故発生時の対処, 救助訓練



7.1 スイムテスト

沈をしたら、「艇につかまり、離れて泳がないこと」が原則です。加えて、基本的な泳力の確保が必要です。(競漕規則上も、水泳ができることが必須です)

現在泳げない人は、焦らず「立ち泳ぎを覚え、浮いていられる安心感」を先ず持ちましょう。

現実の沈の場合と同じように着衣のまま泳ぐことも経験しておこう。

具体的な基準はないが最低限、「10分程度は浮き続け、少しは移動できる」程度の泳力は持ちましょう(注:それで絶対十分という意味ではありません)。

指導者は、「選手の泳力を正しく把握する」ことがまず大原則です。新入部員を含めて、全員の泳力を具体的に把握していますか？



7.2 沈の回復訓練



- シングルスカルでの自力回復
- 2×での自力回復
- 1×による回復補助(上級者向け)
- バックスティつき1×での回復
- 回復できない場合,艇に捕まっておく方法



両方のハンドルを持って泳ぎあがる.

両方のハンドルを持って泳ぎあがる.

練習すれば,沈艇に近づきリガーを保持して回復を助けることもできる.コンディションによっては二次遭難に注意が必要.



シングルスカラーは,**必ず早めに**,沈の回復訓練を受けてください.

安全を確保(モーターボート補助,救命具装着)して実施しましょう.

水質の悪い水域で沈の回復訓練が困難という話も聞きました.いざ沈したら水質のことなど気にしていただけない,とか.だとしても,それは回復訓練をしない理由にはなりません.いざというとき,沈した者は,通常の回復技術を,水質の悪い不快なコンディションの中で実施しなければならないと考えれば,どのような水域でも回復訓練は必要です.かならず回復訓練を実施しましょう.

7.3 心肺蘇生法



- 心肺蘇生法は、一度受講して方法を理解していればよいというものではありません。
- いざというとき、実際にできるよう、機会があれば何度も受講しましょう。
- 最新手法では、(人工呼吸もさることながら)「心臓マッサージ」の即時実施・継続が脳死防止に重要であると強調されています。



7.4 救助訓練(状況把握-通報-出動, 搜索)



- いざというときに備えて、
遭難～通報, 救助などの
演習をしましょう。
(実際の演習はもちろん有効ですが、まじめにすれば、
机上シミュレーションでも
かなり役に立ちます)
- モーターでの救助は下流
から接近します。
- 二次遭難には十分注意し
なければなりません。